

やまと 民俗への招待

鹿谷 勲

奈良茶飯の流行は、あちこちに痕跡を残している。赤穂浪士の討ち入り(安永2)年の正月から2月にかけて、家臣に茶飯を振る舞ったり、姉君から奈良茶・茶飯を賜う記事が登場する。

俳人松尾芭蕉も奈良茶に言及している。芭蕉の句に「侘びてすめ月侘斎が奈良茶歌」『武蔵曲』1682(天和2)年という句がある。月侘斎とは月を侘びる人を風雅人めかした仮の名で、「奈良茶歌」も芭蕉の造語のようだ。月を侘びる風流人が、奈良茶を食べて歌

大和郡山藩の二代藩主柳沢信鴻は引退後、江戸の六義園に住んで日々の

出来事を『宴遊日記』に残しているが、1773

(安永2)年の正月から

2月にかけて、家臣に茶

飯を振る舞ったり、姉君

から奈良茶・茶飯を賜う

記事が登場する。

俳人松尾芭蕉も奈良茶

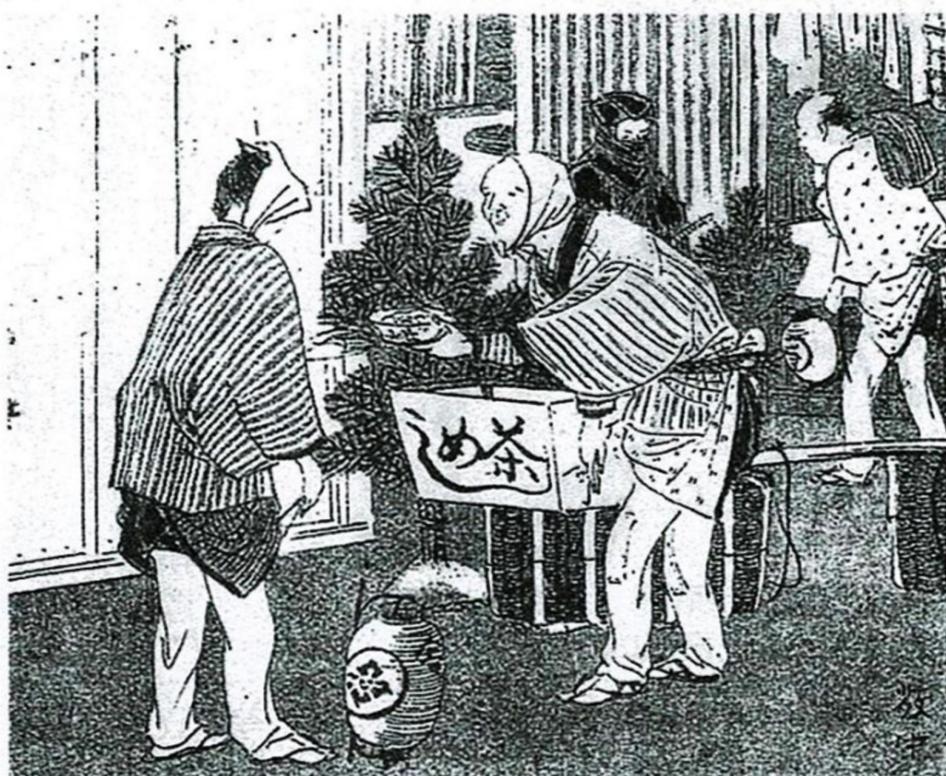
に言及している。芭蕉の

句に「侘びてすめ月侘斎

が奈良茶歌」『武蔵曲』

1682(天和2)年

俳人たちも茶飯に関心



茶飯売り(大晦日の夜更けに掛け取りの男に茶飯を売る茶めし屋)＝1893(明治26)年の『風俗画報』より

う声は、侘びしくも澄みわたれと、侘びを標榜する俳人の生活を礼讃したものだ。弟子支考は

「奈良茶三石喰ふて後はじめて俳諧の意味をしるべしとは、ある時に故翁の戯ながら」(『俳諧十

論』)と芭蕉の言葉を伝えている。奈良茶を三石も食べたなら、俳諧の道も分かるだろうと戯れに言

ったというが、素朴な茶と米の味が作り出した奈

良茶を、侘び暮らしの象徴的な食べ物と考えてい

たことが窺える。ここで芭蕉の言う奈良茶とは、茶飯だろうか、茶粥

だろうか。いくつもの副食を付け加えた高価な食

べ物ではないだろうか、伊賀上野出身の芭蕉に

は、茶粥こそが慣れた味であったのではと私は思

う。しかし俳人の奈良茶

飯への関心は以後も続き、「格別な角豆奈良茶を草の庵(我常)、「八重桜京にも移る奈良茶哉」(沽圃)などの句があり、明治には「奈良茶飯出来るに間あり藤の花」と高浜虚子は詠んでいる。1901(明治34)

年9月2日、正岡子規は、朝と昼に粥四碗ずつ食べ、夕食にも奈良茶飯四碗を食べていた(『仰臥漫録』)。奈良茶飯の流行は一般庶民にまで及び、茶飯におでんが付きものとなったり、餡かけ豆腐と茶飯が町で売られたりしていた。

奈良民俗文化研究所代
表
次回は2月5日